

星・誰だかの如く力一杯振り上げた左足は、突然柔らかい草むらになった地面に取られて、息子が見ていれば腹を抱えて大爆笑を取れただろう程見事な勢いでジェクトは地面を転がった。

「うばああ!」

どこかで聞いたようなけつたいな叫び声が闇夜に響く。一、二秒突つ伏した後、がはりと立ち上がった。

「うつるんだよあの断末魔!」

照れ隠しに叫んでみたジェクトだったが、返答もツツコミもなかったのかえって虚しいだけだった。

とりあえず一息ついて、ようやくジェクトはあたりを確認する余裕を取り戻した。

空には三日月。景色は、有り体に言えば野山。草むらと雑木林しか見えない。遙か遠くだろうか、ぼつりぼつりと民家の明かりらしきものもみえるが、頼りになるものが細かい月明かりだけというこの状況では、規模も距離も判別の仕様が無かった。だが、精々よくて田舎の村はずれと言ったところではないだろうか。

——見た事ねえ世界だ。

この出鱈目で適当極まりない異世界は、繋がりはめちやくちやでも比較的安全して存在し続ける空間は決まっている。カオスが優勢になった昨今では高の事だ。時折見た事の無い空間が立ち現れることもあったがそれとて、ああ、あそここの空間の世界と関わりがある場所だろうな、という程度に出所の知れる

場所ばかりだった。

ここは違う。空気がどここの空間とも違っている。

ジェクトはわりと文明の発達した世界の住人だが、どちらかと言えば野生の勘で立ち回るタイプだ。こういう直感はます外さない。

「次元城から時々見える森に似てるっちゃんあ似てるが」

気配は似ていないか。どこか深い闇の薫りは、エクステスともパツツとも遠い気がした。

「ま、考えてもしょうがねえか。」

野生型なので見切りを付けるのも早い。どうせ適当に歩けばどこかにつくだろうと、ジェクトは歩き出す。なぜか野營などは考えなかった。

握っていたはずの魔法石——ゼロムスの結晶の事は、完全に忘却していた。

がざりと、遠くの草むらが揺れる音がした。

多い。三、四はいるか？ 小動物じゃねえな。そう思いつつも、ジェクトは特段構えもしなかった。何故なら、それと共に聞こえてきたのは、荒い人熱れ……何をしているか、なんてあまりにもあからさまな、それ。

——おいおい、こんな外れもお盛んなこったね。

口に出さず苦笑いして、それでもジェクトは念のためと思いそちらに近づく。カオスの連中かコスモスの連中か知らないが、ちよつと気配の人数が多い

のが気になった。まあ世の中好き好んでそういうシュミのヤツもいるだろうけど、そうじゃなかったら少々後味が悪い。カオスが召還された身ではあれど、そういった無理強い行為はジェクトとしてはリアルで好むものではなかった。AVとかなら別だけど。

合意の上ならとつと退散すりゃあいいやとのんびり構えて歩いていると、男の野太い呼吸音に僅か、高い音域の声が混ざった。

「んう……」

「ミシア？ まさか雲？ コスモスのお嬢ちゃんはんめえ。などという思考はこの0.3秒で吹き飛んだ。

「子供!」

駆け出したジェクトが空気を割るようになって茂みへ躍り出る。

三人の破落戸に組じ敷かれているのは、年端もゆかぬ男の子だった。

「おい坊主、大丈夫か。しつかりしろー」

手加減など一切無用で殴り倒した男たちはびくりともせず倒れている。死んでるかもしれないが、構わないと思つた。

息はあるが、軽く頬を叩けど意識は取り戻さなかった。少し遅かったか、事は殆ど済んだ後だったのかもしれない。

「くそー」

こういふとき、衣服らしい衣服を身につけていない自分を少しだけ恨む。仕方が無いので腰布を取り外しぼろぼろになった少年を包んで、ひとまずは綺麗にしてやろうと水辺を探し、駈けた。

川はすぐに見つかった。

もちろん手ぬぐいなんてものもないので、少し腰布を引きちぎって横抱きにした少年を洗い清めてやる。まさか気を失った子供を川にどつぶり浸けるわけにもいくまい。それくらいの分別はジェクトにもある。

何度目か水に入れば、川面に映る三日月が揺らぎ散った。

傷だらけの子供だった。

あちこちに擦り傷切り傷を作っている。かなり大きなものもある。相当手荒に扱われた事は容易に見て取れた。見はしないが、局部も酷い事になっているだろうと想像がつく。

「……一発で済ますべきじゃなかったなオイ」

誰に言つても無く歯ざしりする。幼い頃のティータがよぎる。子を持つ身として許せる行為ではなかった。

細かい月明かりの下ではよく判別できないが、ずいぶんとくすんだ髪をしているように見える。茶色だろうか。ろくに食べてもいないのか、細い体付きだ。きらりと、頭頂部が月明かりに煌めいた気がしたが、なにかの加減だろつと気にも止めなかった。